

常照

第869号

先日の記念法要お待ち受け巡回 小樽地区「仏教人生講座」における川村妙慶先生のお話を文章にして先生の許可をえて三回に分けて掲載致します。

私たちは何を求めて生きていくのか(一)

● 答えを求めてしまう私たち

本日はようこそお参りくださいました。京都から参りました真宗僧侶の川村妙慶と申します。宗祖親鸞聖人お誕生八百五十年、そして真宗の御教えが開かれて八百年、さらに北海道真宗教団連合結成五十周年という大きな節目のご縁の中で、こうして皆さんと共に仏法を聞かせていただけることを、

心よりありがたく思っております。

私は決して難しい話ができる者ではありません。むしろ真宗の教えというのは、特別な知識として学ぶだけではなく、日々の生活の中でこそ味わわれていくものだと考えております。また、山にこもるような修行だけでもなく、家庭や仕事、人間関係の中で現実と向き合うことこそが、私たちにとって最も厳しく、そして最も大切な修行ではないでしょうか。

そこでまず皆さんにお願いしたいことがあります。それは「答えを持たずに聞いていただきたい」ということです。私たちは普段、どうしても答えを求めてしまいます。「私の人生はこれで良かったのか」「あの人と自分はどちらが正しいのか」と、善か悪か、白か黒かをはっきりさせようとします。そして人から「あなたは正しい」と言われれば安心し、「それは違う」と言われれば傷つ

いてしまうのです。

しかし仏教は、そうした答えを与えるものではありません。むしろ「問い」を与えるものです。「私は何を求めているのか」「なぜこんなにも苦しいのか」「なぜあの人に對して怒りが湧くのか」と、自分自身に問いを向けることが大切なのです。この問いを持つことによって、私たちは初めて自分の内面と向き合うことができるようになります。そして、その問いを持ち続ける中で、自分でも気づけなかった心のあり方に少しずつ出会っていくことになるのです。

さらに言えば、人は答えを得ることで一時的な安心を得ようとしめます。しかしその安心は長く続きません。状況が変わればまた新たな不安が生まれ、再び答えを求めてしまうからです。それに対して問いは、自分の内面に向き合い続けるきっかけとなります。問いを持つことによって、私たちは

揺れ動く心と正面から向き合うことができ
るのです。

● 現実と向き合うということ

真宗の教えは、特別な場所にだけにあるのではなく、日々の生活の中にあります。私たちは毎日、思い通りにならない現実に出会っています。人間関係がうまくいかなかったこともありますし、思いがけない出来事に苦しむこともあります。その現実を避けようとするのではなく、どう向き合うかが問われているのです。

ある時、タクシーに乗った際、運転手の方がこう言われました。「スマホとコンビニと酒があったら生きていける」と。現代らしい言葉ではありませんが、その言葉の奥には深い意味がありました。私は何度か問い返しました。「本当にそれで生きていけますか」と。すると最後にその方は、「それは自分をごまかしているだけや」と本音を語ら

れました。

その方は奥様を亡くされていました。最後に感謝の言葉も伝えられなかったという後悔を抱えておられたのです。その悲しみと向き合うことができず、日々を紛らわせることでなんとか過ごしていたのです。人は苦しみの中にあるときほど、その苦しみから目をそらそうとします。しかし仏教は、その苦しみの中にこそ意味があるのでないかと問いかけてきます。

また、現実と向き合うということは、単に我慢することではありません。ただ耐えるのではなく、その出来事の中に意味を見出していくことが大切なのです。「なぜ自分がこんな目にあうのか」と嘆くのではなく、「この出来事を通して何を学ばされているのか」と問い続けることが、私たちの歩みを深めていくのです。

●分ける心が苦しみを生む

私たちはすぐに物事を分けてしまえます。善か悪か、正しいか間違いか、勝ちか負けか。しかしその分け方はすべて自分中心の見方です。人から認められれば優越感を持ち、認められなければ劣等感に苦しむ。この二つは別のものではなく、常に表裏一体で存在しています。

さらに私たちは、自分のことを分かっているつもりで、実はほとんど分かっていません。順調なときには気づきませんが、苦しみに直面したときに初めて、自分の弱さや執着が現れてきます。仏教でいう「観る」とは、広い視野で自分を見ることです。

自分の都合の良い見方ではなく、ありのままの自分に気づくこと。そのために問いを持つことが必要なのです。問い続ける中で、私たちは少しずつ自分自身に出会っていくことができるのではないのでしょうか。

(次号に続く)

